

II. 人文学部向けの週4コマ集中フランス語について

高田晴夫

1. 実施体制：

授業の実施体制として、3コマを日本人教員が、1コマを外国人教員が担当してきました。また、その方針は当初から変わっておりません。これは、ドイツ語、ロシア語、中国語も同じですが、違う点は、比較的多くの日本人教員が参加しているという点ではないかと思えます。平成9年から、教員の所属を超えて、ローテーション方式で、人文学部のフランス語教員がすべて参加できるようにシステムを変えました。

2. 教育内容：

過去6年間の「教養科目講義概要」を参照。

3. 教授法：

文法・読本中心の受信型授業から、ロール・プレイ、インフォメーションギャップを利用した発信型の授業まで、学習目標に応じた教授法を採用しながら、個々の教員が創意工夫して授業を行っております。また、今年夏に行ったようなバリ・鉦山大学との学生交流のような授業外活動に積極的に参加できるような機会を設けているのが特徴かと思われれます。

4. 成果：

さらに、受信型授業にかたよっていたそれまでの教育に発信型授業を取り入れる事が出来るようになった結果、4技能においてバランスの良い教育をほどこしています。また、極めてレベルの高い発信型授業ではないにしても、バランスのとれた本格的なフランス語学習への第一歩として、学生に対して、十分な動機づけを与えることは確実に出来たと思われれます。

5. 問題点：

集中フランス語の場合、ドイツ語やロシア語と違い、長い間、ベルギー人のフランス語が堪能な

方がいたのですが、本当の意味でのネイティブによる授業は困難でありました。4年前から直聘非常勤講師の制度が導入されました。しかし、このポストの運用の難しさを特に強調しておきたいと思えます。このような不安定なポストの教育に及ぼす影響は大変大きいと言えます。改善の余地があります。

III. 集中ロシア語授業の現状と問題

中澤敦夫

授業では、一貫した文法教育を行うという主旨で、一人の日本人専任教員が3コマを担当し初等文法を教え、残りの1コマをネイティブの教員が担当し、発音、口頭での表現などのトレーニングを行っている。

一般にロシア語の初級では教えるべき文法事項が多いが、現在の新潟大学の教養教育では2年次以降の「中級」の段階で、さらに高度な文法を体系的に勉強する授業機会が少なく、また、現状では実用的なロシア語の知識よりも書かれていることを理解するための語学の要求が高い、などの理由から、集中的に初級文法を教える集中ロシア語の授業は非常に意義がある。

しかしながら、この5年間の実践で次のような問題点も現れるようになった。

- ① 教える側は「ロシア語の初等文法を集中的に学び、さらに高度な学習につなげる、レベルの高い授業」として位置づけていても、学生にはそのような意識は薄く、人文学部で必要とされる、初修外国語8単位をてっとり早く1年で履修してしまう機会としてとらえており、高度な学習につながらない。
- ② 初修外国語8単位を課している人文学部の学生（主に1年生）のための授業になってしまい、学習意欲のある他学部、他学年の学生の参加がほとんどない。
- ③ この数年の学生の全般的な学力低下の反映なのか、集中授業がはじまった5年前の学生のレ

ベルよりも成績が目に見えて落ちており、よりよい学習機会にもかかわらず、語学力が身に付いてないという、奇妙な結果になっている。

以上の問題を踏まえて、集中ロシア語の授業では、次のような対策を考えている。

教科書と有機的につながったオーディオ・ビデオの教材を用いる。

そのために、よい教科書を選定し（集中コースの教科書は現状では少ない）、必要なら補助教材を自分たちで作成する。さらに、作成したものをプリントではなく、大学で印刷出版するようなことも必要。

今後の課題だが、修了時点での短期の語学コースの参加を授業に組み合わせれば、いっそう効果は上がるだろう。

IV. 初修中国語集中授業前期の成果

笠原ヒロ子

初修中国語の集中授業における学生の授業参加と試験の結果について論じる。2名の教師が、週2回ずつ授業を担当し、互いに連絡を取りながら、同一の教科書を使用して、授業を進めた。使用している教科書は、1課が1文章8文字前後からなるA、B各4文章前後の対話文で構成されている。

内容は、対話活動の練習が、無理なく、合理的に進められるもので、始めて中国語を学ぼうとする者が、抵抗少なく入ってゆけるものである。

授業は、聞き取る訓練と言い伝える訓練が主体になった。音が意味を持って認知され、音の連続による内容を把握し、且つそれを基として、対話活動を行った。

中国語では、漢字を用いて、文章として表現される。日本人である学生が、所謂漢文読みを避け、出来る限り音によって内容を把握するよう促すため、大意にそぐわない範囲でなければ、“可”としながら授業を進めた。そのためには、文法に触れずに語句の説明のみで、あるいは、日本語から類推可能な場合には、時によっては、語句の説明すら行わずに、対話活動を進めた。

上記の授業を経てきた学生の授業活動への参加状況を基に、試験結果から、問題点を明らかにしてみる。

1. 31名中、10名が60点から69点の範囲内にあり、11名が85点以上にあつて、かなり成果を見た層と、さほど成果を見なかった層の二手に顕著に分かれている。
2. 授業不参加（欠席）0回で60点台が2名、70点台が4名、不参加2回で60点台が1名計7名の存在を見る。